
とある電光の超人戦記

タシリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある電光の超人戦記

【Nコード】

N2016Z

【作者名】

タシリ

【あらすじ】

渡伴はレベル4の読心能力者である。高い能力と天性の勘の良さに恵まれた少年の前に新人類を名乗る超能力者が現れ、彼に襲いかかる。しかし、それは彼の真の覚醒の時であった。

次々と現れる新人類・ミュータント、そして〈帝国〉の影。科学と魔術の交差する物語の中、もうひとつの超能力が交わる。※イナズマンは原作漫画版を元にしていますが、時折特撮版の設定が入る場合があります。

第一話 渡伴という男（前書き）

文章の練習を兼ねた趣味丸出しの作品でございます。

第一話 渡伴という男

スパンツと渴いた音とともに少女のビンタが渡伴の右頬を捉えていた。走り去る少女の背を眺めながら、伴はひりひりと痛む頬を撫でて「ふむ」と息を吐いて、取りあえず、意味もなく制服の襟をなおした。

七月十九日、夏休み前日のこの日は一学期の締めくくりとして終業式の為学校に行かなければならない。そんな日に伴は右頬に、入学して以来七度目となる紅葉を作って教室に入った。

「おおー、おはようさん！」

ついさっき振られたばかりだと言うのに、伴は何とも調子の良い声でクラスメイトらに挨拶を交わした。すると、皆は伴にできたもみじを見て、「またか」、「これで何人目だ？」などと彼を茶化しながらも挨拶を返してくる。もはや伴のもみじはクラスメイトたちにしてみれば見慣れた光景となっていた。

「よお、毎度季節外れの紅葉を見せてくれるにゃあ」

伴が席に着くと、短髪金髪のサングラスをかけた少年、土御門がニヤニヤと笑いながら歩みってきた。伴は椅子にもたれかかり、前足を浮かせながら、

「なあに、今回は一カ月続いたぜ？ 次は一年続くって」

グッと親指を立ててハッキリと断言した。強がりでもない、その自信に満ち溢れ、キラキラと輝いた表情はいつそ清々しいものだっ

た。

「その自信がどこから湧いてくるのか、知りたいぜ全く」

土御門の後に続く様に、ツンツン頭の通称不幸男、上条当麻が呆れたように突っ込んだ。

「人生前向きが一番だろ？ 振られたぐらいでくよくよするなら、新しい恋を探す努力しようぜ？」

「お前って、本当に女好きだな……いつか刺されるぞ？」

「お前にだけは言われたくないって感じがするのは俺だけじゃないよな……まあ、俺は浮気はしない主義でね。今回も以前の彼女たちも意見の食い違いとかって奴さ」

「レベル4の読心能力者なのか？」

伴の意外な発言に上条は怪訝な視線を向けた。上条の言うとおり、渡伴という男は読心能力者、いわゆるサイコメトラーとも呼ばれる能力を持つ。読んで字のごとく他人の心、思考をみとる事が出来る伴がその気になれば、恋愛関係のもつれなど簡単に回避できるのではないかと上条は考えていた。それに伴はそこそこ上位のレベル4である。読み取りの精度は保障されているようなものだ。

実際、伴は女好きのお調子者、もう一つおまけに怠け者扱いされる男だが、気配りのできる奴だ。それに手際も良い。一見すると矛盾しているようにも見えるが、読心術で相手の思考を読めばそれくらいはできる。喧嘩を売られそうになっても、先にそれを察知して一目散に逃げる。上手い能力の使い方をしている男と言われていた。

「おいおい、それじゃつまらないじゃないか。恋ってのはさ、こう……直感的って言うか、本能の赴くままについていうか……小細工な

しってのが良いじゃん？」

「せやで、カミやん。女の子相手に心読むって、そりやもう、渡の乙女心を弄ぶ鬼畜ルート決定やで！」

「お前、俺が良い事言っただのに、一気に台無しだな！」

妙にテンションの高い青髪ピアスの委員長が大声でそんな事をいうものだから、クラスメイトの視線が伴に降り注ぐ。

「伴の野郎、女を泣かせるような奴だったんだな！」

「やだ、渡君ってそんな人だったの」

などなどの不名誉な誤報が飛び交う。とはいえ、皆本気にはしていないし、いわゆるノリと言う奴だ。それに夏休みに入り、このネタでいじられる事もないから、伴としては特に心配するような事でもない。約一名の女子生徒を除いてはだが。

「ふしだらな奴だ！ 貴様はついに堕ちるところまで堕ちたのだな」

バシンツと机を叩く音と共に怒声が伴の耳に響く。

「いやさ、吹寄さんよお、俺は女の子には誠実なつもりだぜ？」

ため息をつきながら、後ろを振り返る。そこには腕を組み、こちらを見下すような視線を向ける少女、吹寄制理がいた。吹寄はギロリと睨みをきかせ、聞く耳持たずといった具合に伴達に詰め寄ってきた。

「貴様のような女好きはふとした拍子にタガが外れる。レベル4として恥ずかしいとは思わないのか？」

「そりゃ、言いがかりだ。それに、ふしだら云々だったら、上条の

方だって！」

「うえ、俺かよ！」

と、いきなり話をふられた上条だが、本人には思い当たる節はない。しかし、伴の言葉に反応した吹寄はその鋭い眼光を上条に向けた。

「ほお？」

「おい、渡、いきなりなに言いやる！」

「うるせえ！ 知ってんだぞ、お前が常盤台のお嬢様と追いかけてこしている事！」

「はあ？ なんでお前がそんな事……つか、そんな嬉し恥ずかしなもんじゃねえし！」

伴の急降下爆撃並みの発言に教室中がざわめく。とりわけ男子生徒たちは吹寄並みの眼光を上条に向けていた。土御門と青髪ピアスは感情のない視線を送っていた。

「まあ、なんぜよ……舞夏には近づかないでほしいにやあ」

「カミやん、ラブコメってんのやなあ」

二人はぽんぽんと上条の肩を叩いて、吹寄の後ろへと立った。

「貴様……中学生にまで手を出すとは。今度という今度は見下げたぞ」

吹寄は若干の侮蔑を含んだ声色で言い放った。どういうわけか数名の女子も吹寄に同意するような形で頷いていた。

クライスマイトのほぼ全員から敵意ある視線が上条に向けられる。

伴はさっさと後ろの方へと逃げて事の次第を見守る事にした。この後、上条がどうなるのか。そんな事は考えなくてもわかるものだ。

「ふ、不幸だー！」

上条の絶叫が教室にこだまする。いつもの日常だった。

『可哀そうに。なむなむ』

伴は上条の冥福を祈るように両手を合わせた。だが、すぐさま思考は別に事になり、伴は学生支援が利く電化店のチラシを眺めた。一年以内、事故などやむを得ない場合で破損、故障した器具を交換してくれるという学園都市にしては太っ腹な支援であった。

学校が終わってしまえばあとは一足早い夏休みである。校門を出れば学生たちは各々帰路につくか、そのまま友人たちと遊びに行くかである。かく言う伴は特に予定がなかったが、適当に街にでも繰り出すか、などと考えていた。

「さ、て、とっ！　まずは本屋でも冷やかに……おお？」

ふと、目の前には吹寄の姿があった。

「そういや、あいつの家はこっちの方角か……おおい！」

別に他意があったわけではないが、クラスメイトなのだから声くらいはかけても良いだろうぐらいの勢いで伴は吹寄を呼んだ。彼女

の方も伴の声に気がついたのか、立ち止まって無愛想な顔を向けた。

「む……貴様か」

「露骨に嫌な顔するなよ」

「まあいい……で、なにか用？」

「いや、別に？ 知り合いがいたから声をかけただけ」

「はあ……」

なぜか吹寄はため息をついてこめかみを押さえて、頭を横に振った。

「良いか、渡伴。学校も終わって、明日から夏休みに入る。なのに、お前は用もなく、私を呼びとめたのか？ そんな暇があるなら、宿題をやるか、健康的にスポーツするなり、学生らしい事に取り組んだらどうだ？」

「お日様の下、元気よく歩いている。これ以上に健康的な事はない。それに知ってるか、サプリメントばっか飲んでると逆に病気になるんだぜ？」

「そんな事はどうでもいい」

吹寄はきっぱりと切り捨てた。伴は内心『ひでえ』とぼやいた。こうなると吹寄の舌は止まらない。

「第一に貴様は……」

「先輩！」

吹寄の小言のスタートダッシュに割り込む形で透き通るような美声が入る。伴と吹寄はその声の持ち主の下の方へと振り向くと、そこには品の良い制服を着た美少年がいた。背は平均的だが、すらっと伸びた手足と、美しい黒髪、どこかの御曹司と言っても通用しそ

うな完璧美少年がそこにはいた。

「透か。お前も学校終わったのか？」

透と呼ばれた少年は「はい」とまるで子犬の様にぱたぱたと伴の下へと駆け寄ってくる。だらしない学生と明らかにおぼっちゃま学校に通っていきそうな美少年という繋がりが見えない二人が親しく接している姿を前に吹寄は目を白黒させていた。混乱する吹寄に気がついたのか、透は愛嬌のある笑顔を彼女に向けて深々と頭を下げた。

「あ、こんにちは。丸目透です。渡先輩にはいつもお世話になっています」

「ああ……うん……吹寄だ……こいつが迷惑をかけている。おい……！」

吹寄が最後の方を小声で、小突いてくる。

「なに？」

「この純粹そうな少年とどういう関係だ。まさか、女だけに飽き足らず……」

「いやいやいやい！ 至ってノーマル、ノーマルな関係！ そんな一部のお姉さま方の喜びそうな趣味はないね！」

伴は慌ててそれを拒否した。そんな不名誉はいらない。何だって年下の友人がいるだけでニツチな趣味を持っていると思われなければいけないのか。

「……」

対する吹寄はジト目で伴を睨んでいた。そっち系の趣味は別とし

ても、伴が透に悪影響を与えている存在に見えているようだ。というか、読心を使わずともそういう感情がびんびんと伝わってくるのは気のせいだろうか。

「あー……なんだ……」

伴はバツが悪そうに頭をかいて透の肩に手を置いて、小さくため息をついた。そして、意を決したように、

「透、お前確か彼女欲しいって言ってたな！　よし、ナンパの仕方を伝授してやる。着いてこい！」

「え、あ、はい！」

いきなりの事だったが、透は伴に合わせて走り出した。一瞬呆気にとられた吹寄は「やっぱり！」といった感じの表情をして、二人の後を追った。「純粋な少年を不良の道に引き込むな！」と怒声をあげたものの、出遅れた吹寄が二人に追いつく事はなかった。

対して、まんまと逃げおおせた伴と透は息を切らしながら、街中まで来ていた。息グリしいが、当面の危機を回避できた事の安心感と何を馬鹿な事をやっているのだろうかという感情が合わさって、伴は妙に高揚していた。

「くはははは！　久々に走ったな。筋肉攣った……」

一通り笑い終えた後、日ごろの運動不足を嘆くように伴はその場にうずくまる。透はそれを苦笑しながら見ていたが、彼は息があがっている意外は特に変化はなかった。

攣った筋肉が元に戻るまでに少し時間がかかったが、暫くすると

何事もなかったように伴は立ち上がり、

「んじゃ、ナンパでもしますか」

と、透を強制的に連れて人ごみの中へと突撃していった。

「いいか、透。ナンパと言っても取りあえず声をかければ良いってわけじゃない。そんなチャラ男みたいなナンパはカスだ。成功率も少ない。ひっかかっても碌でもない女だ」

「はあ……」

「そこでだ。まずは狙う女の子を見定める。ここが重要だ。透、あの大人しそうな女の子を見てみる」

伴は本屋の前で雑誌を読む、少女を指差す。透から見ても大人しそうな子であった。

「ああいう大人しい子ってのは理想が高い。押しに任せていけばまあ成功するだろうが、あとが大変だ。逆にあの高嶺の花っぽい感じの美人だ」

次に伴が指差したのはキリッとした見た目の少女だった。美人だがどこか近寄りがたい雰囲気でもある。

「なんとも近づきたい感じがするが、あれはヤマアラシのジレンマってのに似ている。あのタイプは、突破口させ突けば後は簡単だ。まあ、どっちも全部同じってわけじゃないから、それを見極めるのは難しいが……そうだな……」

伴は人ごみの中、目を凝らして辺りを見渡す。すると、一際目立つ服装の少女を発見する。腰まで届くのではないかと思える長い髪

をポニーテールでまとめ、半そでのTシャツを着たえらく胸のどかい少女だった。人ごみの中に紛れるようにいるので、全身はよく見えないが日本人にしては背が高い方だ。

「あれだ。あんな感じの子は落としやすい。行くぞ透。俺が見本を見せてやる」

「え、先輩、本気ですか？」

「大丈夫、大丈夫」

自信満々の笑顔を浮かべる伴はずんずんと人ごみを裂いて目当ての少女まで歩み寄る。近くまでくると、少女の全身が見えてくる。なんとも不思議な格好であった。Tシャツは余分な布を結んで腹が見えているし、ジーパンをはいているが、左の太ももが露わになっていた。ブーツも膝まで伸びて、ホルスターのように巻いたベルトにはやたらと長い棒が刺さっていた。

『物干し竿か？』

不思議と言うよりは奇妙な少女だった。伴は声をかけるのに躊躇した。それ以上に何か違和感があったからだ。しかし、周りの人間は特に気にしたような風もなく普通に歩いている。伴が踏みとどまっている時であった。ふと、その少女となぜか目があった。

「……ッ！」

なぜかはわからないが、少女は驚いたように目を見開いた。

「え、どうしました？」

いきなりそんな顔をされるので、伴は少し戸惑いながらも声をか

けた。すると、少女は何かを確認するように辺りを見渡して、最後に伴たちの方へ視線を向けていた。

「いえ、お気になさらず。それでは、私は先を急ぎますので……」

それだけ言うと、少女はあっさりと踵を返して人ごみの中に消えていった。伴と透は狐につままれたような顔をしながら、互いに見合わせた。

「なんだ……失敗の例も見せておかないとな！ 次行こう、次！」

「先輩……挫けませんね」

ぐいぐいと引っ張る伴に透は苦笑しながらも、彼の背を追った。

「まあ、その自信の塊が先輩の良いところなんですけど」

その眩きは伴の耳には届かなかった。

そろそろ日も落ちてきた頃合い、ナンパの戦績はあえて語るまい。二人はあてもなくぶらぶらと街中を歩いていた。時々ゲームセンターに入って、格闘ゲームで近所の小学生にボコボコにされたり、本屋に入れば地雷臭しかない漫画しかなかったり、と中々ハードな時間を過ごしていたわけだが、透は文句も言わずに着いてきていた。

しかし、一日中歩き回っているわけだから、そろそろ足を休めたところである。それに腹の空く時間帯でもあった。

「ちと、早いが飯にでもするか」

「そうですね……この辺って確かファミレスありましたよね？」

「ああ、ファミレスね……」

伴は腕を組んで悩み始める。個人的にはファミレスには行きたくないのだ。別にその料理が嫌いなのでもないが、今日は行きたくなかった。

「どうしました？」

透が不思議そうな表情に覗き込んでくる。

「いや、な、ほら、あれ見ろ！」

伴はとっさに目に入った不良集団をこっそり指差した。大体的にやると因縁をつけられそうだったからだ。

「今日は夏休み前だし、ファミレスなんかは多分満席だ。それに不良っていうのは、よくファミレスに行く。絡まれると厄介だ。どれくらいかっていうと、頼んだ料理を食べる前に面倒事に巻き込まれるくらい厄介だ。別のところで食べよう」

「ず、随分と具体的ですね……別に構いませんけど」

「よしよし、良い子だ。褒美に牛丼おごってやる。食ったことないだろ」

「牛丼くらいありますよ」

「なに？ お前さんたち見たいなのは、庶民の飯を食うのか？」
「バカにしすぎですよ」

そんな珍妙なやり取りを続けながら、二人は牛丼のチェーン店に脚を運んだ。夏休み前日の夕食が何とも安上がりなものに仕上がっ

てしまったのは味気ないが、たまには良いだろう。しかし、特盛りの牛丼二杯はかなり出費であった。伴はまだしも、透の場合その細い身体はどこに特盛りが入るのが不思議であった。

「先輩、今日はありがとうございました」

「なあに、これくらいならいつでも……は無理だが、時々おごつてやる」

「お願いしますよ。それじゃ、僕は門限があるので……」

流石はおぼっちゃま学校と行ったところだろう。全寮制の施設は門限が厳しく定められている。その時刻がそろそろ迫ってきていた。

「おお、んじゃまた新学期……に……ッ！」

一瞬、伴は眩量を感じて、身体をふらつかせた。軽くこめかみを押さえると、態勢を立て直して、軽く深呼吸をして身体を落ち着かせた。

「先輩？」

「いや、気にするな。歩きつかれたのか、立ちくらみだよ」

「大丈夫ですか？」

「気にすんな。ほれ、門限に間に合わなくなるぞ」

伴はいつもの調子でへらへらとした顔をして、透の背中を押しやった。透は心配そうな表情を浮かべていたが、伴は無理やり歩かせた。すると、透も諦めたのか、「お大事に」と一言行ってその場から立ち去った。透を見送った伴は小さくため息をついた。

「なんだ、さっきのは……？」

渡伴には、読心能力とは違った別の能力があった。伴はそれを予知能力と勝手によんでいたが、実際は恐いぐらいに勘が良いという程度だった。しかし、晴天の日、今日は雨が降るなと思えば、本当に雨が降り、あの道は危ないと感じれば、本当に事故が起きた。テストの答案だって、山勘でいけばなぜか正解する。おかげで成績はウナギのぼりだ。今日のファミレスだって、何か面倒な事が起きそうだと思ったから行かなかった。電化製品のチラシを見たのだから、なぜか交換した方が良いと思ったからだ。理由はいらない。この勘は幼い頃から自分の役に立ってきた。だから、伴は過剰ともいえる自信を身に付けた。

しかし、先ほどの眩暈は、今までの感覚とは違った。勘でしかなかった予知が明確な映像として映ったからだ。だが、テレビの白黒ノイズと同じようにとぎれとぎれでしか見えない奇妙なものだった。巨大な棘に磔にされる、そんな奇妙な映像。

伴は悪寒が走るのを感じた。上条ではないが、夏休み前日にそんな縁起でもない予知とは中々に不幸だ。それでも伴は妙な胸騒ぎを押さえられずにはいらなかった。

彼の頭上には、夏のアゲハ蝶がひらりひらりと舞っていた。

第二話 覚醒の兆し

七月二〇日は夏休み初日である。この日、伴は珍しく遅い時間に目が覚めた。時計を見れば昼の十二時を回っており、網戸にしても夏の日差しが彼に大量の汗をかかせていた。それに頭がぼんやりとして重たい。本当に風邪でも引いたのかと思いつながらも、一秒で測れる体温計を使ってみると、全くの平熱であった。はあとため息をついた伴は、べったりと張り付く寝間着を脱ぎすて、うなだれながらも洗面所で顔を洗う。そのあとすぐに濡れたタオルで全身を拭くと、一息ついてお茶をがぶ飲みする。お茶はひどくぬるく、それは冷蔵庫が壊れていた事を証明した。ついでの家電製品の殆どが使用不能になっていた。

チラシ見という良かったなあなどと考えながらも、伴は服を着替えて管理人室に事情を説明すると、どうやら昨夜、落雷があったらしく伴以外にも何人かが被害を受けたらしい。このアパートは比較的被害が少なかったらしいが、うちの学校の学生寮の方は殆どが全滅したようだった。中年男性の管理人は頭をかきながら、業者が電化製品を交換してくれるそうで、自分がそれに立ち会うから、アパートの住民は別に部屋にいらなくても良いと言ってくれた。

そうなると暇になったもので、大人しく部屋で夏休みの宿題をやるのも気が引けた。なによりクーラーが使えないのでは、まともに机に向かうことすらできない。かと言って昨日の雪辱を晴らすべく街中に躍り出るのも気が乗らない。本来ならゲーム三昧の一日を過ごさずだったのがパアである。

だから、あてもなく近所を歩きまわって、日ごろの運動不足を解消しようなどという暴挙に出たのだ。取りあえず透の学生寮まで歩

いていこう。運が良ければそこで涼んでいこうと思ったが、今回ばかりは上手くは行かなかった。

「透、何やってんだ？」

学生寮の前で透を発見したのだが、彼は玄関の前でノートを持って座り込んでいた。

「ああ、先輩。観察日記ですよ。宿題なんです」

「観察日記ってお前、小学生みたいな宿題だな……」

「あははは、確かにそうですね」

一体なにを観察しているのだろうかと思い、伴は透の視線の先を見やった。そこには一つのサナギが観葉植物の茎に出来上がっていた。図鑑や教科書などでは見て来たが、実際に目の当たりにするのは初めてであった。

「ほお……凄いもんだ」

「でしょ？ 夏型のアゲハ蝶のサナギなんですよ。友達と交替でこいつが羽化するのを観察しているんです」

炎天下の中、御苦労な事だと伴は思った。

「羽化の瞬間か。見れば感動的だろうな」

「ええ、ビデオにでも収めようかなって話になって、今友人がビデオカメラを取りに行っているんです。それに、このサナギはできて結構時間が立っているらしくって、今日中には羽化するんじゃないかって……」

「本格的だな。んじゃ、ま、邪魔になると悪いからな。俺はここで」「はい！」

透と別れて伴はまた暇になった。忙しいよりはマシだが、何もやる事がないのはそれはそれできついものがある。結局、暇つぶしの為には街に出るしかなかった。だからと言って、ナンパを実行するわけでもない。

「ネットカフェに行けば、飯も食えるし時間もつぶせるな……金は降ろせば良いし……」

という、現代っ子的な暇つぶしを行うしかなかった。そう考えると自分の生活は家電製品（主にゲームやパソコン）にどれだけ助けられているのが実感できる。

「よし！」

「なにがよしっ……なのかしらね？」

いざネットカフェへ！ という勢いを早々に崩したのは聞きなれた少女の声だった。伴は嫌な予感を感じながらも、振り返ると、そこには始めてみる私服の吹寄がいた。なにやらぎっしり詰め込んだ紙袋を両手に、吹寄はいつもの鋭い視線を伴に向けていた。

「夏休み初日から非健康的だな」

「家電製品がぶっ壊れたんだ。部屋にいちや蒸し焼きになっちまう」

嘘は言っていない。むしろこれ以上はない全うな理由であると伴は自負している。

「え？ ああ……」

吹寄も話の流れを理解したのか、小さく頷いて見せた。

「そういえば近所の方もそれで慌ただしかったわね」

「だろう？ そんな暑い場所じゃ、宿題もゲームもできない。だから、行くんだよ」

伴はそれだけ言って吹寄に背を見せ、さっさとこの場から離れようとするが、この世話焼きの少女がそれだけの理由で離してくれるはずもなかった事を伴は失念していた。

「だったらスポーツでも何でもすれば良いだろうに」

「あのね……！」

昨日と同じ事を言ってくる。たまらず伴は何か言い返してやろうと思ったが、振り返った瞬間、眩暈に襲われる。直後に流れる映像は昨日と同じ棘に磔にされる映像だった。白黒ノイズが混ざり、スライド画像のように場面が次々に移り変わる光景に、伴は軽い頭痛を覚える。

「い……ッ！」

「おい、大丈夫か？」

こめかみを押さえ、僅かに顔をゆがめた伴を心配するように吹寄が声をかける。それと同時に伴の頭に流れる奇妙な映像もぷつりと途切れ、頭痛から解放される。汗が噴き出すが、先ほどよりは楽な状態であった。

「あ、ああ……多分、夏の日差しが俺を輝かせる為に照りつけるか

らだろ」

「あのね、それ熱中症っていうのよ？」

たいして面白くないジョークである事は理解していたが、真顔で返されるとなんだか悪い事をした気分になった。

「いや、本当に、大丈夫……冗談を言えるくらいには」

「ふん……まあ、確かに意識も言葉もはっきりしている見たいだし……渡、貴様、朝食は食べたのか？」

「いや、昼に起きたからなあ……」

「呆れた……そんな調子で外に出ればふらつくのは当たり前……ちよっと待ちなさい」

言って、吹寄は紙袋の中をこそごとと漁って、飴一粒と飲料水を取り出して、伴に差し出した。

「……………?」

「塩飴と普通のミネラルウォーターよ。これで適度な塩分が取れるはずだから、水の方は……あいにくスポーツドリンクは持ち合わせてないの」

「お、おお……流石は健康マニアだな……」

「いいから！ さっさとネットカフェにでも何でも、行きなさい。」

半病人にがみがみ言うほど、常識がないわけじゃないわ」

「今日はいっつになる優しいじゃないか。なんだったら、俺が元気になるまで……」

伴は口をつぐんだ。吹寄が殺人光線と化した視線を向けてきたからだ。同時に右の拳が、正しい手順で握られていくのが見えた。

「今すぐ、病院送りにされなくなったら、目の前から消え失せな

さい」

返事よりも前に伴は吹寄の前から走り去った。あれはマジの目だった。あまり走ってはいないが、取りあえず吹寄の姿は見えなくなった。乱れた息を整えるように深呼吸をして、もらったミネラルウォーターを口にする。ひんやりとした水が身体の中を通っていくのがわかった。ついでに塩飴を口の中に放り込む。

「……ああ、俺この味嫌いだわ」

塩飴というより、塩の塊を舐めているような味だった。学園都市の新製品かなにかなのだろうが、塩の味を強くするよりもっと食べやすい味にするという努力はなかったのだろうか。伴は飴を噛み砕いて、水で押し流した。

「うえ、なんか、変に味が混ざった気がする……」

吹寄はこんなまずい飴を買いだめて食べきれののだろうか。的外れな心配をしながら、伴は口の中に広がる塩の味と格闘しながら、クーラーのきいたネットカフェを目指した。

不覚だった。ネットカフェを見つけて、意気揚々と入店し、適当に昼食を頼んで、個室でネットサーフィンを楽しんでいたのに、気がつけば夕暮れの時間帯、しかし伴がネットをいじっていたのは一時間かそこら、いつの間にか寝落ちという奴をやってしまったらしい。そこまで疲れていたのか、自覚はないが、払った料金の殆どを無駄にした事だけはわかった。今更、ネットを再開する気にはなれ

ず、すでに家電の入れ替えが終わっているであろう、アパートに帰ろう。そう考えて、伴はとぼとぼとネットカフェから出る。陽の落ちた街は、それでもある程度の人の波を保っていた。

伴は欠伸をしながら、アパートへと進路を向けた。すると次第に人の姿も少なくなっていく、近所の公園にまで差し掛かると、もう人の姿は見えなくなった。元々人通りの少ない道だったし、アパートの近くまで行けばまた人が増える。そんな場所だ。

だから、前方から人がやってくるとどうしても、その人の様子を観察するように視線が映ってしまう。スーツ姿の若い男が伴のすぐ前方までやってきていた。

『こんばんは』

「あ、こんばんは」

伴は軽く会釈をして、返事を返した。そのまま男性とは通りすぎるはずだったのだが、伴は奇妙な感覚を覚えた。

『さっきの人……口を動かしていなかったな』

腹話術で挨拶なんて洒落たことをするわけがない。伴は、ただなんとなく後ろを振り返った。

「……………」

すると、先ほどの男性がこちらを向いて、にこにこ笑っていた。伴は少し気味が悪い感じがして、思わず後ろへ下がった。

『なんだ……この人』

伴は不信感をあらわにするように眉をひそめた。そして、何を思ったのか、目の前の男に対して読心を試みたのだった。だが、次の瞬間、不意に発せられた男の声に伴は背筋が凍りつくような寒気に襲われた。

「読心術か……基礎はできるみたいだが、その程度はシャットダウンすれば防げる」

「なに？」

冷静を装うように短く答えたが、伴の心臓の鼓動は早まっていた。

「そんなに恐がらなくても良い。今のはちょっとしたテストだ」

対する男は、伴の考えを見透かしたように小さく笑った。まるで、読心術を使ったように、自分の焦りが見破られている。

『こいつ……俺と同じ読心能力者か……！』

「それには少し語弊があるな。読心術如き、我々新人類にしてみれば、初歩の初歩。掛け算の九九のようなものさ」

伴の思考に返答を返すように男は言った。

新人類？ 一体何を言っているのか、わからなかった。瞬間、伴はまた眩暈を感じた。ほんの一瞬、一秒にも満たないくらいの僅かな時間。だが、伴は棘が目の前にいる映像を見た。まるで、目の前の男と重なるように。

「くっ……！」

考えるよりも先に伴は走り出した。男から逃げるように、不安を振り払うように、とにかく走った。どれだけの距離を走れば良いのかなんてわからない。ただ男の姿が見えなくなれば、それでよかった。しかし、伴の不安はぬぐえなかった。走り続けながら、伴は後ろを振り返る。男の姿はなかった。

だが……

「あ……」

正面を向き直すと、前方にはスーツの男が先ほどと同じような笑顔で立っていた。まるでテレポートをしたように、最初からそこにいたように、男は悠然と立っていた。

「読心術、テレパス、テレポート……この街では貴重な能力だが、我々新人類にしてみれば、最低限の力でしかない。ところで……」

男は自然な動作で腕を伸ばした。

「サイコキネシスは……貴重なのかな？」

男がバツと掌をかざした瞬間、伴の身体は不可視の力によって吹き飛ばされた。

「がっ……ああ！」

尻もちをついて、恐怖に揺れる眼を男に向ける。男は「ふむ」と腕を組んで、思案するように顎に手をかけた。

「君はまだ」

『覚醒していないのか』

口頭から、そして念話で、男は伴に語りかけた。やれやれといった具合に頭を振って、「手間がかかる」と、息を吐いた。

「ならば、追試だ」

その瞬間、男の身体からは無数の棘が浮き出る。腕から、脚から、頭から、そして顔からも、ありとあらゆる場所から真っ黒な棘が人の皮を突き破って、生えてくる。ズタズタの布切れとなったスーツの残骸はひらひらと宙を舞った。そして、顔から生えていた棘が植物のツタのように蠢き、人間の目に当たる部分に空洞が生まれ、そこから黄色に光る眼球が浮かび上がる。

「ああ……なんだよ、それ……？」

伴はがくがくと震える身体に無理やり力を入れて、なんとか立ち上がる。夢で逢ってほしい、冗談であってほしい、これではまるで、

「まるで、あの光景じゃないか！」

伴は叫んだ。だが、目の前の『棘』は無感情に、凶器と化した人差し指を伸ばし伴の脚元に打ち込んだ。

「死にたくなければ合格するのだな」

ざわざわと棘男の身体が蠢く。無数の棘の先が伴に向けられる。その先の事は考えたくもなかった。予知の映像と同じように礫にされる。何とかしなければ間違いなく死ぬ。理解はしていても、それから逃れる方法がわからなかった。

『念じろ。自分を跳ばすように』

だから、この瞬間、棘男とは違うエコーのかかった声が頭に響いた時、伴はそれに身をゆだねる以外なかった。突然の出来事ではあったが、すでに動揺している伴の変化に、それ以前にこの別の声の存在に棘男は気がついていないようだった。伴は返事を返さなかった。だが、唾を飲み込んで、震える手を握りしめた。こうなれば、腹をくくる。この声の持ち主は味方だ。そんな根拠のない自信が伴に生まれていた。

『念じろ。ミュータントのテレポートに複雑な計算はいらない。感覚をつかめ』

「……………」

伴は目を閉じた。はっきり言って、何を言っているのかさっぱり理解できなかったが、この声は自分がテレポートをできると言ってきている。だから、やる。伴は強く念じた。どこに跳ぶかなんてのは、わからない。とにかく、あの無数の棘から逃げれば、それでよかった。

対する棘男は目を閉じた伴を諦めたのだと判断した。そして、これ以上は興味はないと言わんばかりに冷徹で無慈悲に身体中の棘を伸ばした。

そして、無数の棘は伴を貫いた……かに見えた。

「な、に？」

棘男は啞然とした。貫かれるはずだった、伴の姿が一瞬にして消

えたからである。そして、背後でテレポートアウトを感知した『棘』は小さく笑い、手を叩いた。

「ははは！　どうやら赤点は免れたようだね。だが、まだまだ……平均点には及ばないぞ、渡伴君？」

「そうかい……」

皮肉ともとれる棘男の言葉が癪に障ったが、伴はそれ以上に始めてのテレポートに対して、感動よりも先に驚きが生じていた。自身を特に負荷らしい負荷もなくテレポートさせる。これだけでもレベル3のテレポーター並みの力である。そんな能力を伴は、まるで箍が外れたかのように、簡単に行ってしまった。

『一体何が起きてるのか、わかんねえけど……このままテレポートして逃げちまえば……』

「ははは！　逃げようとしても無駄だ。君はまだ新人類、ミュータントのテレポートには不慣れだ……学園都市のテレポーターにも限度があるように、覚醒したばかりの君じゃ……せいぜい、私の周りをうろちよろすることしかできない」

「チッ……！」

元々そう上手い事話が転ぶわけがないことを伴は理解していた。だが、小馬鹿にされたように言われるのは頭にくる。だからと言って、伴には覚えてたのテレポートしか対抗手段がなかった。読心術も予知も目の前の棘男には通用しない。

『どうすりゃいい……』

『サナギ、お前はサナギ……』

また声がした。だが、今回ののは先ほどとは違った。まるで伴に同

調するかのように、声が伴の思考が重なっていく。

「サナギ……サナギ……」

頭に映像が流れる。卵から幼虫が孵化し、そして糸を吐いてサナギになる。それが繰り返し、繰り返し、伴の頭の中に流れた。次第にそれは胎児までに幼くなった伴の姿に変わった。胎児が成長し、今の伴の姿になる。そして……

「俺はタマゴ……ヨウチュウ……サナギ……サナギになる。サナギに……サナギ……」

「何をブツブツ言っている？ まだテストは続いているぞ！」

動かなくなった伴に対して、棘男は両腕を伸ばした。その鋭い尖端が一直線に伴を貫こうとする。しかし、伴はそれをテレポートで避けようとはしなかった。初めから避けるつもりなどないかのようになり、両手を前にかざし、そして、受け止めた。

「……！」

予想とは違った展開に棘男は声もなく驚いた。しかし、彼の驚愕はそれだけではなかった。両腕の棘を受けたためた伴の両手はいつの間にか茶色く変色しており、肉体もまるで岩のように硬化していく。筋肉が肥大化していき、伴の服はそれに耐えきれなくなり、破けていく。

「ゴリキショーライ！」

唸るような声と共に渡伴の肉体は完全に変化した。肥大化した筋肉は岩石のように盛り上がり、肩と頭部はまるで一体化したように

も見える。細く、鋭い目は棘男を睨みつけ、豪腕と化した腕で掴んでいた棘を握りつぶす。

「ふ、ふふ……遂に覚醒したのか！」

棘男は両腕の棘を切り離すと、また新たに腕を生やす。『サナギ』と化した伴は棘を放り捨てると、拳を握り、力強く一步を踏みしめた。

「う、うう……ううううう！」

獣のような低い唸り声が響いた。

第三話 砕ける自信

『サナギ』と化した伴はその巨体に似合わない跳躍を見せ、豪腕を振り下ろす。殴るわけでもチョップをするわけでもなく、ただ力任せに振り下ろす。棘男は慌てる様子もなく、ただ後ろに飛び退くだけでその攻撃を難なく避けて見せた。直後、サナギの豪腕がアスファルトの地面を砕き、陥没させる。

だが、サナギにとっては納得のいかない結果でもあった。それは棘男に攻撃を避けられたからではなかった。

「う、く……動きが鈍い！」

くぐもった声で伴は、サナギは唸った。頭の中ではもっと早く動いていたつもりだった。サナギは地面から拳を引きぬき、棘男を正面に捉える。

『身体が重い……さっきよりも棘野郎の動きは見えるのに、身体がついていかない！』

サナギとしての身体能力はすでに常人の域を超えていた。先ほどの跳躍も普通の人間では助走をつけても不可能な距離である。それでも、鈍い、重いと感じるのだ。いつもと勝手の違う身体に、彼は翻弄されていた。

ジリッと前に迫るサナギではあったが、同じように突撃しても避けられてしまうのは目に見えていた。

「なるほど、パワーはあるようだ！」

対する棘男は腹正しい事に余裕の態度を崩さず、こちらの力量を測っているような言い草を続ける。

「このっ！ なめやがつてえ！」

サナギが地団駄を踏むように一歩踏み出す。棘男はそれに反応すると再度、バックステップで間合いを取り、牽制の為に肩とわき腹の棘を伸ばす。サナギは両腕をクロスさせて防御姿勢を取る。ザクッザクッと音を立てて、両腕を挟まれる。

「うおおおお！」

だが、サナギは棘を左手で捉えると、力任せに手前まで引つ張る。踏ん張る暇もなく、棘男はサナギの腕力に引き寄せられる。眼前には大きく右腕を引いたサナギの姿があった。当のサナギもこの一撃をくらえばその気に食わない余裕の態度も崩れると考えていた。

「……………！」

だが、結果はサナギの空振りに終わった。そのままの勢いで無様に転がるサナギは一瞬何が起きたのか理解できなかった。そしてそれを理解するよりも先に背中に衝撃が走る。

「ぐ………があ！」

無数の棘がサナギの背中に突き刺さり、その内のわき腹と右肩は棘が貫通していた。貫通した棘はそのまま地面に打ち込まれており、サナギは抜け出す事もままならなかった。そして、頭上からサナギを見下したような棘男の声が響く。

「言ったはずだ。テレポートは初歩の初歩だと。これは減点だな」

棘男は腕を組み、空中に静止したまま身体中の棘をサナギに突き刺していた。そして、一瞬にして棘を引きぬくと、再度テレポートを行い、サナギの目の前に現れる。

「ぐっ……このお！」

「ふん……」

反射的に動かせる左腕で振り払おうとするが、激痛の為か声に張りがなく、勢いも乏しいサナギの一撃を棘男は難なくテレポートで回避した。そして、背後に回り込むと、サナギの後頭部目がけて回し蹴りを放つ。全身が凶器ともいえる棘男の攻撃は鋭い痛みと衝撃をサナギに与える事になる。岩石のように強固な表皮にいくつかの傷が刻まれる。

「おおおお！」

サナギは殆ど我武者羅に振り返ると、そのままタックルを仕掛けるが、それよりも前に無数の棘がサナギに突き刺さり、その巨体を押し出す。頭部を除いた全ての部位に棘が突き刺さり、まさに磔の状態であった。サナギは無理やりにも抜け出そうともがくがそれがかえって棘を食いこませる事になった。

「なんでだ……?」

呻くように、サナギは声を漏らす。

「テレポートが出来ない……いや、能力の感覚がつかめない！」

覚えたはずのテレポートも得意の読心術も、どれだけ感覚を思い出してもピクリとも反応しない。一切の能力が使えなくなっていた。そして、いつの間にかあの声も聞こえなくなっていた。もがき続けるサナギは焦りを覚え、それは次第に恐怖へて変化していった。だが、サナギはそれを認めようとはせず、振り払うように叫び声をあげた。

「ああああああ！」

「く、ふふふ……はははははは！」

「何がおかしい！」

今まで大きく声をあげて笑う事のなかった棘男の突然の大笑いであった。サナギの噛みつくような声すらも、威嚇にはならなかった。

「そうか……渡伴君。その姿では超能力は使えないのか。それは滑稽だ！ はははははは！」

まるで喜劇を見たように、棘男が腹を抱えて笑う。その度に振動が棘を伝わってサナギに苦痛を与えていた。

「いやはや……とんだ落第生だ。期待をして損だったよ」

「……………ッ！」

笑い声から一変、ゾツとするような冷たい声がサナギを貫く。棘男は突き刺していた棘を全て引き抜くと、倒れ込むサナギを見下すように黄色い目を怪しく輝かせた。サナギは無様に這いつくばり、何とかしてその場から逃げおおせる事だけを考えていた。

『勝てない！ こいつには勝てない！』

だが、力が入らない。豪腕を誇ったはずの巨体はすでにボロボロだった。震える身体を引きずり、サナギは棘男から離れようとする。すると、ふわりと身体が宙に浮く。それは自分の意志ではなかった。サナギはほぼ直感的に棘男のサイコキネシスである事を理解した。無理やり立たされる形になったサナギだったが、サイコキネシスの捕縛を振り払う力などない。

「すまないが。我々新人類に、我らが帝国に弱いミュータントなど必要ない！」

言って、棘男は何のためらいもなく、右腕の棘でサナギの額を貫いた。その瞬間、サナギの意識は呆気なく途絶えた。棘男はサナギが動かなくなった事を確認すると、棘を引き抜き、亡骸に目もくれずに踵を返した。

「無駄な時間だったな」

そう吐き捨て、テレポートでその場から離れようとする。その瞬間であった。棘男はバチツと静電気が走るのを感じた。そして、膨大な力を背後から感じる。

「なに！」

慌てて、振り返るが、それと同時に閃光が走る。棘男はとっさに顔を庇い、光から目をそらす。光が収まったそこには、サナギの死体はなかった。時間にして一秒にも満たない一瞬の出来事であったが、棘男は状況を理解せざるを得なかった。

「テレポートだと!? あの状態で、奴は生きていたのか！」

棘男は叫ぶ。理解せざるを得ない。そんな事はわかつていたが、それでも棘男は信じる事が出来なかった。

ぶかぶかのパジャマを着た月詠小萌は冷蔵庫からキンキンに冷えた缶ビールを取り出して、ルンルンと子どものようなステツプで、散らばっているビールの空き缶を蹴飛ばし、進路上に置かれた煙草が山盛りの灰皿を行儀悪くつま先で退けるとちやぶ台の前に腰を下ろした。

「うふふのふ」

鼻歌を歌いながら、プルタブに指をかけ、ふたを開けようとした瞬間であつた。ドスンと肌色の何かがちゃぶ台に落下し、跳ね返ると小萌を押し倒す形になる。小萌が持っていた缶ビールは衝撃で手元から離れ、中身をまき散らしながら小萌と落ちてきた存在に降りかかる。

「ぎゃう！」

つぶれたカエルのような声をあげた小萌は下敷きになっている己の身体を何とか引きずりだすと、突然の落下物に目を向けた。

「え、ええ！ ええええええ！」

小萌はつんざくような悲鳴をあげた。なぜならそれは、自身の教え子である渡伴その人だったからだ。それだけなら、まだ驚きの声

で済んだであろう。だが、うつ伏せになっていたとは言え、伴の姿は糸纏わぬ状態であった。いくら生徒とは言え、それなりに成長した男の裸が自分の上に覆いかぶさっていたとなれば、小萌も女である。羞恥心がわきあがるのも当たり前であった。

小萌は顔を真っ赤にしながら、ぶんぶんと腕を振り回し、なるべく伴の身体を見ないように目を閉じ、顔をそむけて、取りあえず怒鳴った。

「わ、わ、わ、渡ちゃーん！ 一体全体、どんな格好で先生の前に現れやがりますかー！」

しかし、伴からの返答は一向に返ってこなかった。小萌は「渡ちゃーん？」と恐る恐る声をかける。チラッと片眼を開けて様子を伺うが、伴はうつ伏せのまま動く気配はなかった。

不審に感じた小萌は意を決して、伴の全身を視界に入れる。

「おお……意外と肌が白い……じゃなくてですねー」

瑞々しい肌にちよっぴりの嫉妬を感じながら、小萌はそっと伴の頬を軽く叩く。反応はないが、よわよわしいがしつかりとした呼吸と人肌の体温が感じられる事に安堵した小萌は、立ち上がると洗濯かごに入れっぱなしになっていたバスタオルを取り出して、伴の腰に巻きつける。

途中、身体を仰向けにすると、小萌はハッと口元を押さえる。伴の身体には無数の傷跡が残っていたからだ。まるで何かに刺されたような跡、うっすらと血がにじんでいる姿は痛々しいものであった。

そんな怪我人を床に直接寝かせるわけにもいかなかったと思った小萌はタンスの中の布団を取り出そうとして立ち上がる。ふと、僅かに冷静さを取り戻していた小萌は、伴がどのようなにして自分の家に現れたのかを思い出していた。

「渡ちゃんは読心能力者なのに、なんでテレポートで……はっ！まさか、テレポーターの人と……！」

一瞬、「健全な学生にはあるまじき行為を！」とも考えたが、身体中の傷から見て、それはない。だが、それはそれで大きな問題になる。能力者同士の激突は学園都市でも少なくはないが、もし伴がそれらに巻き込まれたのだとしたら、担任として、個人としても黙ってはられない。

伴を布団に寝かせた小萌だったが、次に考えたのは、伴の格好である。全身傷だらけとは言え、そこまで大きな外傷は見受けられなかった。消毒してガーゼと包帯を巻けば感染予防はできるはずである。問題なのは、彼の下着と衣服であった。時々家出少女を保護する事もあるが、その為か男用の衣服等はいにく持ち合わせていなかった。

「私とした事が、これはうっかりだったですね……これからは男物も手に入れないと」

家出少年の保護も真剣に考えながら、小萌が現状をどう打開しようか悩んでいた。買いに行けばよいのだが、伴を一人自宅に残すのも少し気が引けた。

「考えていてもしかたないですね。まずは傷の手当てを……どこにしまったかなあ？」

衣服の事は後で考え、小萌は包帯や消毒液などを取り出して、伴の手当てを行おうとした。消毒液をガーゼに染み込ませたところで、ピンポンとチャイムが鳴り、すぐさまドンツと対新聞屋用の頑丈な扉を蹴飛ばす音が聞こえてくる。

正直、今は勧誘とかの相手をしている暇はない小萌だったが、直後に聞き慣れた声を聞いて、作業を中断した。

「小萌センサー！俺です、上条です！」

どこか切羽詰まったような上条当麻の声が小萌の耳に届いた。現状、伴が最優先に心配である事に変わりはないが、上条の様子もただ事ではないようだった。小萌は聞こえてはいないだろう伴に「ちょっと、待っててくださいねー」と声をかけて、扉をあける。

「はいはい、上条ちゃんですねー、ちょっと待ってください」

「先生、ちょっと本気で困っているんで、入らせてもらいますよ！」

開けた直後になぜかシスター姿の少女を背負った上条がずいずいと小萌を押しつける形で部屋に入っていく。

「か、上条ちゃん！先生、今はちょっと困りますー！」

「先生、これ見て、俺が冗談で来たと思うか？」

そう言って、上条は背負っていたシスターの背中を見せるようにした。

「ぎゃっ！」

バックリと割れ、大量の血を流している少女の姿が目に入り、小萌は思わず後ろに倒れそうになった。そんな慌てた小萌を無視して、上条は小萌の部屋に上がり込む。

ふと、上条の視界には全裸に近い形で布団に寝かせられている伴の姿が目に入った。

「ちょ、先生！　なんで伴があんな格好で！」

「か、勘違いしないでほしいです！　伴ちゃんだって怪我して、その手当の途中だったんです！」

「んな事言っても……！」

ある意味では健全である上条の思考がよからぬ誤解を生みだしていた。

「もおおおお！　上条ちゃん不幸が移ったですー！」

次から次へと起きる事態に対して、いくら温厚な小萌でも叫ばずにはいられなかった。

伴はバツと目を見開いて、跳び起きた。まず始めにやった事は身体に異常がないかを確認する事だった。伴はひたひたと張り付く寝間着を鬱陶しく感じながら、貫かれたはずのわき腹や右肩を調べたが、穴も傷もなかった。小さくため息をつき、汗だくになっていた額を拭うと、辺りを見渡した。少なくとも自分の部屋ではなかった。若干煙草の匂いが染みついた部屋には、見知らぬ異国の少女がいた。

可愛らしい寝間着を着た銀髪の少女は突然起き上がった伴に驚いている様子でもあった。

「あ……起きたんだね。とうまー！ 彼、起きたよー」

少女が聞き慣れた人物の名前を呼ぶと、どたどたと走るような音と共に上条当麻の姿が現れる。

「伴！ 起きたのか？」

「お、おお……そんな事よりよ……ここは？ お前の部屋じゃないだろ？」

「ここ、小萌先生のアパートだよ。何でも、お前が全裸でテレポトしてきたって……」

「ああ……やっぱり」

上条の言葉に、伴は納得したように呟いた。能力が使えないサナギの状態から、何らかの手段で、恐らく偶然だろうが、小萌の部屋にテレポトした。ふと、伴は棘が自分を貫く瞬間を思い出し、身を震わせる。

上条も伴の異変に気がついたのか、心配そうに顔を覗き込んで、声をかけてくる。

「おい、大丈夫か？」

「……………」

伴は黙っていた。

「一体何があったんだよ？ テレポトもそうだけども、お前全身傷だらけだったんだぞ？」

「言って信じるのか？」

突然、怪人に襲われて、自分も変身して、他の超能力に目覚めました……などと、言って信じる奴はそうそういないだろう。少なくとも自分が言われる立場だったら、問答無用で読心術を使っている。それくらいに突拍子もないものである。

「言ってくれないと、わかんねえだろ？ 信じる、信じないは聞い
てから判断する。それでも、昨日から信じられない事を体験してる
わけだしな。ちょっとやそつとじゃ、無碍にはしないつもりだ」
「その……女の子絡みか？」

伴が少女の方に視線を移すと、上条は頷いた。

「ああ。だからさ、何があったんだ？ いつも自信満々なお前がこ
こまで落ち込むなんて見たことないぞ？」

「……………」

それでも伴は何も言わなかった。別に彼らを巻き込みたくないな
どという正義感からではない。今まで自分が絶対の信頼を置いてい
た能力が、自分の自信がなんの役にも立たなかった事実を思い出し
たくないだけだった。

「わかった。無理には聞かねえ。そうだ、腹減ってるだろ？ 何し
ろ、三日も眠ってたわけだしな。先生がお粥作ってくれたんだ。温
めてくるから、ちょっと待ってろよ」

上条はそう言って台所に向かった。残された伴は、見知らぬ少女
と二人だけになった。一瞬、チラッと少女の顔を見る。自分たちよ
り二、三歳は下であろう少女と上条の関係は一体何なのだろう。

「君……名前は？ あ、俺は伴、渡伴だ」

気になったと思った瞬間には名前を聞いていた。気分が落ち込んでいるとはいえ、それくらいはスツと出てくる。女の子に声をかけるのはナンパで慣れていた。

「私はね、インデックスって言うんだよ」

「インデックス？」

人の名前にしては変だと思った。だが、外国の子らしいし、そういう名前もあるのだろうなと伴は解釈していた。

「俺も人の事言えたりじゃないけどさ、なんだって先生の家にな？」

「とうか、なんで上条と？」

「とうまも言ってたけど……色々あったんだ。怪我した私をここまで運んでくれて……」

そこからのインデックスは饒舌だった。曰く、上条の家のベランダに落ちてしまった、ご飯を食べさせてくれた、絶体絶命の危機を救ってくれた、他にも色々。途中、『魔術』という単語が聞こえたが、それ以上にインデックスの嬉しそうな顔を見て、伴はある予想をしていた。

『おやおや、上条さんはまたフラグを立ててやがるな』

日ごろから不幸なんだ言っている男だが、こと女難に関してはもはや呪いでもかかっているのではないかと言えるくらいだった。それを考えると、なんだかおかしくなってきた、伴は小さく笑った。

「ははは！」

「ん？ どうしたの、ばん？」

「いや、さ……上条らしいなって……」

「……？」

意味がわからないといった感じでインデックスは首をかしげる。少しだけ、いつもの調子を取り戻した伴はニッと笑みを浮かべて、インデックスに耳打ちするように言った。

「なに、あいつは学校でも有名な不幸男でな。よく厄介事に巻き込まれたりするんだが、その都度女の子があいつに好意を持ってな。インデックスって言ったか？ 君のライバルは多いってとさ」

一部誇張しているが、あながち嘘ではない。実際、インデックスもその類であると伴は確信していたからだ。本人がそれに気が付いているかどうかは不明だが。

しかし、伴に言われて見て、少しは理解したのか、インデックスは顔を真っ赤にして、ぶんぶんと腕を振った。

その態度だけでも、インデックスが上条に対して悪い感情を抱いていない事だけはわかる。伊達に何回も振られていない。そう言った感情の機微には聡いつもりだった。

「そ、それは関係ないかも！ 別に私はどうまの事をどうこうとか、そんなんじゃない……」

「けど、嫌いじゃないだろ？」

「うううう……」

恥ずかしさのあまりか、インデックスは小さく縮こまって唸って

いた。

「おーい、仲良くなるのはいいけど、あんまり騒ぐなよ」

そうして、お粥を温め終わった上条が茶碗を持ってきてくれた。瞬間、インデックスはキツと上条を睨みつけた。しかし、その顔は真っ赤なままだった。いわゆる照れ隠しである。伴に言われた事に対する羞恥心を彼にぶつけようとしているだけだった。

「とうま!」

「な、なんだよインデックス……お前、顔赤いぞ? 大丈夫か?」

「とうまは色んな女の子に良い顔しているんだって?」

突然の言葉に上条は噴き出しそうになった。そして、伴の方に顔を向けると、ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべた彼の姿があった。

「伴! てめえ!」

「とうま! 正直に答えるんだよ。淫欲は大罪なんだからね!」

「待て待て、話が飛躍しすぎだってば……」

あれよこれよと話が肥大化していった、最終的にインデックスが上条に跳びかかり、それを避けようとして態勢を崩した上条がアツアツのお粥をかぶる事になるという寸劇を伴は眺めていた。

「不幸だああああ!」

上条のいつもの叫びが、不思議と癒しに感じた。

部屋主の小萌が帰って来たのは、夜になってからだだった。夕飯の買い物と、伴の着替えを買ってきてくれたらしく、伴もそれに関しては素直に礼を述べた。その後、四人で簡単な夕食を済ませると、インデックスがお風呂に入りたいとお願いしてきた。どうやら、彼女も自分と同じく寝込んでいたらし。

だが、小萌のアパートには風呂はない。管理人に借りればあるのだが、今更は無理であった。小萌が提案したのは近くの銭湯に行ってみてはどうだとの事だった。当然、伴にも誘いがあったが、伴はまだ体調が戻っていない事を理由にそれを断った。結局、上条とインデックスの二人だけで銭湯に行く事になって、小萌は笑いながら、懐かしい歌を鼻歌で歌っていた。

「ふんふん。赤い手ぬぐいを持たせた方が良かったですかね？」
「さあ？　それで、間違いが起きたら、先生の責任ですけどね」
「それはちよつと困るですー。そんな事になったら、とりあず上条ちゃんにはお説教だけじゃ済まさないですけどねえ」

笑って答えた小萌だったが、目は真剣だった。

「ところで……」

小萌は伴と真正面から向き合うように座り込んだ。一瞬にして、雰囲気が変わった小萌に伴はなぜか気圧される感覚があった。

「上条ちゃんたちには、ああ言ってましたけど、渡ちゃん、本当は別の理由で銭湯に行きたくなかったんじゃないんですか？」

「……………！」

凶星だった。いくら調子が戻ったとは言っても、その奥にある恐怖心は簡単には拭いされない。伴は外に出て、棘男と遭遇するのが恐かった。もう一度、奴と出会えば確実に殺される。伴はいつの間にか震えていた身体を抑えるようにした。

「すみません……」

伴はただ謝る事しかできなかった。小萌は少し悲しそうな顔をしたが、すぐに微笑んで、「落ち着いたらでいいです」とだけ言ってくれた。

「それじゃ、先生はちよつと用事を片付けてくるです。すぐに戻ってきますけど、その間に身体を拭いておくのですよ？」

「わかってますよ」

短く返事を返して、伴は小萌を見送った。一人、部屋に残された伴は寝間着の裾をめくって匂いを確認した。

「先生の言うとおり、吹いた方がいいな……」

伴はタオルを取って、台所に向かう。その時だった。

「い……！」

眩暈と共に頭痛が走る。予知だ。

流れる映像には上条の姿があった。そして、どこかで見た事のある女、これは以前ナンパしようとした少女だった。二人は対峙していた。少女は持っていた長い刀を抜いて、次の瞬間には場面が変わ

り、上条が倒れている映像が流れて、終わった。

伴は膝について、呼吸を整えた。今の予知が正しければ、上条の身に危険が迫っている。伴は立ち上がろうとするが、脳裏に棘男の姿が浮かび、力が入らなかった。

「ど、どうしたんだ！？ 立てよ！」

伴は自分に言い聞かせるように怒鳴った。だが、脚が腕が震え、伴はその場から動けなかった。

数時間後、ボロボロになった上条を小萌が担いで来て、インデックスはわんわんと涙を流していた。伴はその光景をただ黙って見ているしかなかった。

第三話 砕ける自信（後書き）

主人公をウジウジさせすぎな感じも否めませんが、最初っから覚悟完了していると、話があっさり終わる気がするし、渡伴という男には似合わないんですね。

そこらへんの変化をちゃんと書いていけたらいいなあ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2016z/>

とある電光の超人戦記

2011年12月10日11時52分発行